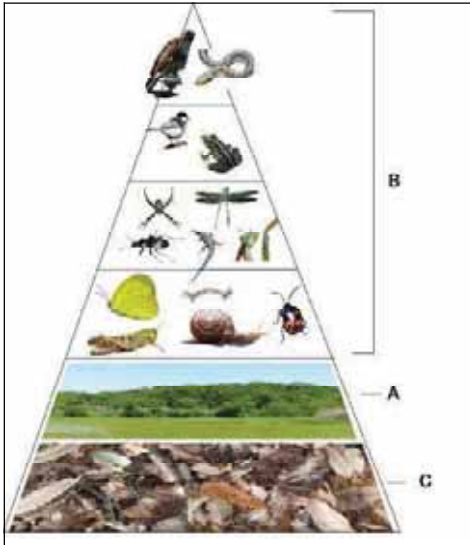




北風(風速5~6m/s?)のため波立つ水面。それをものともせず水門の近くにオオバンが浮かんでいました。薄日が差していたので、先月できなかった土壌生物の観察をしながら展望台まで行きました。北風を避けられる場所で”いそうな場所”を探し、3カ所で行いました。



### 土壌生物

左図:この辺りの自然の生きものつながりを簡単に表したもので、生態系ピラミッドといいます。

A : 水、二酸化炭素を使って光合成により養分を作っている植物・・・生産者という

(養分を作りながら、酸素を放出している)

B : A が作った養分を元に生活している生きもの・・・消費者という

B では、草食性の生きものを肉食の生きものが食べるという関係ができています。(食物連鎖)

B(消費者の中)では、上に行くほど数も種類も減って

いく。これは食べたものの内、呼吸によって消費されなかったものを除いた分だけが成長や繁殖に使われるからです。また、上の段階のものが下の段階のものを食べ尽くすわけにはいかないので、上の段階に行くほど食べられる量は減っていく。そのため上の段階の生きものは少なくならざるを得ないことを表しています。

さて、光合成をする植物の成長に必要な養分は、太陽光と水と二酸化炭素だけでは十分ではなく、足りない分を土壌から補っている。その養分は、植物が落とした葉や枝、枯死した木、消費者である生きものの糞や死体が分解されてできている。

土壌生物は落ち葉の下を主な生活場所に行っている生きもので、

枯れ木や落ち葉を分解するのに活躍しています。

大型動物はモグラ、ムカデ、ミミズ、様々な昆虫やその幼虫・クモ、貝類、ワラジムシなどで、ごく小さいものにはトビムシ、ダニなどがいます。これらの動物の間には地上にいる生きもののように食物連鎖が働いています。その元となっているのは落ち葉や枯れ木や枝である。これらを食べる生きものの中でキノコの果たす役割は大きい。植物の体を作る成分にはキノコの菌



糸やシロアリの体内にいるような細菌類にしか分解することができないものがある。枯れ木や落ち葉がキノコなどによって分解されたものが土壌中に広がり、栄養豊かな土壌ができあがっているのです。



ワラジムシ

体長 5 ミリくらい



ヒメキノコハネカクシの一種

体長 3 ミリくらいの昆虫



ゴマガイの一種

長さ 2 ミリくらい



アヤトビムシの一種

体長 3 ミリくらい



シロトビムシの一種

体長 1 ミリくらい

一番多く見つかったのはトビムシの仲間で、落ち葉などを食べている生きものです。落ち葉などを元に食物連鎖が始まりました。何年もかかって土壌が少しずつ厚くなっていきます。



鳥に食べられたツバキ



冬芽



左は小さな実のなるカキの冬芽とその下の葉痕(葉の落ちた痕)です。上はクスノキ(常緑樹)の冬芽です。冬芽は光合成の盛んな夏に作られます。



ヨコズナサシガメ幼虫

太い木の幹に固まっているのでよく見ないと虫とはわかりません。肉食性の昆虫です。



クモの幼体

体長 1 ミリくらい。大部分は糸を風に吹き流しながら飛んでいった後でした。

**植物** スイセン花、カラスノエンドウ、ツバキ花(花が鳥に食べられる)、トウカイコモウセンゴケ、ネズ実、冬芽(アラカシ、コナラ、アカメガシワ、ソメイヨシノ等)、ロゼット(背高泡立ち祠宇、タンポポ等)、**昆虫・クモ** ヤママコ繭、ユスリカ、ヨコズナサシガメ幼虫、ソヨゴメタマフシ、ハモグリバエ痕、クモの卵のうと幼体、**鳥・その他** ハシボソガラス、セグロセキレイ、メジロ、シジウカラ、キジバト、カイツブリ、バン、オオバン、カワウ群れ(若鳥)、タカ(一種)、キノコ:クロコブタケ、地衣類:ローソクゴケ、土壌生物:ワラジムシ、ヒメミズ、シロトビムシ・アヤトビムシの一種、ヒメキノコハネカクシ、ワシグモの一種、微少グモ2種、菌糸、ダニ2種、ゴマガイの一種、

**今回は3月14日(木)、午前9時30分~12時、水資源機構P前集合、参加費100円**